

第7章 獣医師の職域

2節よりなる。獣医師任用資格一覧、獣医師の職場(表)がある。

第8章 獣医学の国際性

3節ある。1924年フランス・パリに国際獣疫事務局(OIE)が設置され、現在160余ヶ国が加盟している。1951年に国際獣医学生協会(IVSA)が結成されている。その他、国際活動組織が列記してある(詳細は省略)。

附表として、獣医師教育制度の紹介:日本, 英, 仏, 独, 蘭, 米, スウェーデン, ベルギー, カンボジア, ミャンマー, ベトナム, タイ。

第9章 獣医療と法

獣医師の資格, 保健・衛生問題法規や動物の愛護と管理に関する法律などが記してある。

第10章 獣医療の展開

今後、高度獣医療への期待, 情報化時代の日本獣医学教育の改善や動物看護の紹介。

第11章 獣医療と経営

獣医師の需要事情, 診療施設の運営状況, 米国の状況などが表記してある。

以上、大略の紹介とする。本書に、日本の風土にある馬頭観音信仰, さらには仏教の慈悲, 儒教の仁など, 生命倫理等についての附言やわが国の大学獣医学科のカリキュラムの一覧表の掲示を希望する。

(松尾 信一)

[文永堂出版, 東京都文京区本郷2丁目27番3号, 2007年7月, A5判, 300頁, 4,800円(税別)]

亀田一邦著

『幕末防長儒医の研究』

山口県のどのような都市を訪れたことがあるのかと考えると、岩国へ2回、防府へ1回、山口へ1回、関門へ3回、萩へ1回しかない。つまり筆者は観光目的が主体で学術的な研究旅行をしたことがない。まさに点と線をふわっと通りすぎたに過ぎないので、幕末の旧藩時代の区分も知らぬ筆者には誠に気ウツに傾きかねない。こんな心配の下にこの本を購入したのであった。

しかし儒医の研究という文字にひかれた事が偽りないところである。ところで、山口県の医史と申せば田中助一先生の著作『防長医学史(全)』が上梓されてより55年、再版から24年が経過している。少なくともこの30年間にまとまった周防、長門国の医史の出版については筆者は不勉強ゆえこれを知らない。関東の眼くぼりから申せば、久々の防長の医師研究であり、それも幕末の儒医と限られた点は全く目新しく無関心では居られない切り口といえよう。

内容を見てみると、第1編 坂家連壁考(久坂玄瑞の神医説他)、第2編 防長王学の展開(吉村秋陽とその門人、高杉東行の王学信奉)、第3編

医侠松本涛庵の研究(出自と医事)、第4編 下関と広瀬旭荘(長府娶嫁と赤関厄難)、第5編 下関出身の草莽儒医とその活躍(湖南の中村徳寅、福地苟庵小伝、『茂園残話』の研究)となっている。

著者の亀田一邦氏は中国学専攻で、九州国際大学附属校教員のかたわら山口県史編さん調査委員をされておられる。従って本著作では医師が取組んだ漢詩中心の文化活動を軸として、防長両国に出入した人物関係も調査されている。

日本人の教養の大動脈は古代より漢字、漢文をひもとくことで始まったと云われるごとく、天平勝宝3年(751)に日本最古の漢詩集『懐風藻』1巻が編集され成立した。申すまでもなく漢文学は奈良、平安を通じて宮廷中心の文化であった。と同様に医学、医術も同様の傾向を有していた。鎌倉時代にいたり漢文学は五山文学に代表されるように、僧侶の文化であった。医学、医術においては室町時代に僧医は分けられていった。しかし医師の文化活動としての漢詩作りは江戸時代もひき続き行なわれた。

江戸時代の漢学が朱子学派、仁斎学派、徂徠学

派、陽明学派に大別されるようになり、さらに加えて中国へのあこがれにもどづく長崎唐話学がおこり、幕末の漢詩文作りはとみに盛んとなった。医学、医術においても漢学に応じるように、古医方、後世方、本草学等の流派の発生をみ、またオランダに代表されるヨーロッパへのあこがれは蘭医方として一派をなした。このような歴史の流れの中で、医師が余技としての漢詩作りをしても少しもおかしいことではない。伝統的な学芸参加といえるのではないか。

著者は、幕末の「儒医」論争に多少のこだわりがあるようであるが、志業一本の儒医という限定した概念にとらわず、専門儒家、専門医家、儒医兼業家（主儒従医、主医従儒）の三者すべてを取り上げた。久坂玄機、玄瑞兄弟は本質的には医であり、松本涛庵もまた医学専従者であった。高杉晋作は儒に準ずる者であり、古谷道庵、中村徳貞、

福地苟庵は儒医を兼業し、吉村秋陽と広瀬旭荘は天下の名儒であった。これらの人々の知られざる文化業績を幅広く紹介している。本著を契機に医術、医学方面の業績に少しでも切り込んでいただけたらと願ってやまない。筆者の好みからいうと、東京・共慣義塾設立にかかわった福地桜痴の父、苟庵についてももっと知りたい。小生は、ホブソン著の『全体新論』関連にかかわる小話しか知らないからである。

純粹医学史ではないが、医人研究の新しい部分を開拓されたことに敬意を表したい。

諸家のご一読を希望する。

(中西 淳朗)

[K.K.知泉書館, 〒113-0333 東京都文京区本郷
1-13-2, 2006年10月刊, 340頁, 6,000円+税,
TEL.03(3814)6161]

陳明著

『殊方異藥——出土文書与西域医学』

2007年4月からNHKで「新シルクロード 激動の大地をゆく」が放送されている。NHKのシルクロード特集は、2005年の放送開始80周年記念事業「新シルクロード」に続き実に4回を数えており、このことからして日本において西域は非常に人気が高いのがわかる。西域という言葉から広大な草原や砂漠を連想するように、雄大なイメージに魅せられているからだろう。そのイメージ通り、西域を対象にしている研究は扱う地域が広く、また期間も長い。西域は多言語社会でもあるため、西域を研究するためするには諸民族の使用している多言語に精通しなければならない。そのため評者をふくめて西域学の門外漢にとっては、概略を理解することだけでも非常に困難なことになっている。

著者である北京大学の陳明氏は西域の医学史を研究対象としており、本書は「印度梵文医典『医理精華』研究」(2002年,中華書局)に続けての出版となる。西域はウイグル語・チベット語など

様々な胡語が使用されている多言語社会であるが、医学の上では梵語そしてアーユルベータ医学が基底となっており、西域の医学が外の文化(インドそして中国)からどのような影響をうけてきたかを本書において論じている。本書は次の各章から構成されている。

縮略語 (VII)

図表目録 (VIII)

第1章 残方断簡——西域出土胡語医学文書及其研究概説 (1)

第2章 生命吠陀——西域出土胡語医学文書の知識来源 (19)

第3章 神牛五淨——西域出土胡語医学文書中的宗教因素 (44)

第4章 三辛治眼——西域外来的眼科知識及其応用 (68)

第5章 護諸童子——西域的Bāla-graha 図像及其童子方 (91)

第6章 仙藥長命——西域長年方与唐代長年婆